

近代日本文学への探索

——その方法と思想と——

祖父江 昭二 著

未 來 社

祖父江 昭二（そふえ しょうじ）

1927年 9 月 3 日、兵庫県に生れる

1952年 東京大学文学部美学美術史学科卒業

1957年 同大学文学部大学院（旧制）修了

現在、和光大学人文学部教授・劇団民藝演出文芸部員

近代日本文学への探索

1990年 5 月10日 第 1 刷発行

定価4944円（本体4800円・税144円）

©著 者 祖父江昭二

発行者 西谷 能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川3-7-2

電話（814）5521・〒112

振替・東京7-87385 番

製版・印刷＝東銀座印刷 製本＝黒田製本

乱丁本・落丁本はおとりかえします。

ISBN4-624-60086-X C0091

近代日本文学への探索 目次

——その方法と思想と——

近代戯曲への模索	七
----------	---

——一九一〇年前後を一つの到達点とする——

社会主義思想と文学の問題序論	五六
----------------	----

——一九〇〇年代から一九一〇年代における——

「大正文学」理解の一つの視点	七二
----------------	----

——長与善郎における非歴史的発想を中心に——

プロレタリア文学	九五
----------	----

——主として評論・運動の面から——

「プロレタリア詩」おぼえ書き	一五三
----------------	-----

——二、三の特徴とその意味をめぐって——

「昭和一〇年代」と新劇	一七〇
-------------	-----

——その一面についての見取図——

日本文学における一九三〇年代	一八四
----------------	-----

——いまひとつの見取図——

史的唯物論と文学研究	二三
------------	----

——いわゆる「歴史・社会」学派の「戦前」を中心に——

ファシズムと戦争下の思想・文化	二四五
-----------------	-----

戦後イデオロギー論	二六〇
-----------	-----

二

『それから』の「自然」	二七七
-------------	-----

——漱石論序章——

久保栄小論	二八六
-------	-----

——統一戦線とリアリズムとを視点とする——

青野季吉	三六三
------	-----

葉山嘉樹論	三八一
-------	-----

『上海』論	三九七
-------	-----

——初出と初版本との比較を中心に——

寺田透論序章	四四〇
--------	-----

——その位置と特徴と——

刊行委員会 あとがき	四四九
------------	-----

著者つけたし	四五四
--------	-----

関連作品年譜	四六七
--------	-----

—

近代戯曲への模索

——一九一〇年前後を一つの到達点とする——

一 はじめに——「近代戯曲」をめぐる序説

この「日本近代文学大系」の一巻として出される『近代戯曲集』の「解説」を求められた時、そこに収められることがすでにほぼ決定している戯曲——事情があつてその最初のプランは変つたが——ひいてはその作者たちについての「解説」に終始しなくてもよい、あるいはしないほうがよいという意向を編集者のほうから示された。こちらの理解にひきつけて言いなおすなら、ここに収められる戯曲群を見すえながら、それらをも含めた「日本近代戯曲史」的な「解説」でよい、あるいはそのほうがよい、ということになるのか。そういうふうには「解説」の内容なり形式なりを自由にしてもらつても、かえつて逆に与えられたテーマがとてつもなく拡大されて、こちらの手にあまるということになつたにすぎない。が、むろんいまさら愚痴をこぼすためにそのことにふれるのではない。ではなくて、かりに「日本近代戯曲史」的な「解説」をねらつたとしても（ぼく自身の問題は棚上げしておく、ねらつたがゆえに、かえつて逆にすぐさまおこる問題があり、それにまずふれておいたほうが問題

のありかへの照明に役立つと思われるからである。

それは日本近代戯曲の研究者たちにはほぼ共通して意識されている問題だと思われるので、いまその問題そして問題意識をかなり率直に述べているある研究者の一論文を紹介しつつ、その問題なるものを描いてみよう。二〇年以上、「近代戯曲史への関心を持ちつづけ」、それにかかわる論文を多く発表してきたこの研究者（永平和雄氏）は、その論文集『近代戯曲の世界』一九七二・三（東京大学出版会）の序論に当たる文章、「戯曲史の構想をめざして」と傍題のある「近代戯曲の成立」という一文の最初で次のように言う。

日本近代文学の研究が進み、小説史はもとより、詩・短歌・俳句・評論等各ジャンルについての史的研究がめざましい進展を見せているのにくらべて、戯曲史の研究はいぜんとして著しく遅れているようにおもわれる。各種の近代文学史において、戯曲はきわめて付随的に扱われるか、あるいは新劇上演史をもって代用されているにすぎない。

大まかにこう研究の現状を診断した上で、そしてその診断にぼく自身も反対ではないが、つづけて氏はこう書く。

……にすぎない。戯曲作品の数がそれほど極端にすくないわけではあるまい。とすれば、そうした戯曲に対する不当な軽視は、近代文学の全体像の把握に、ある歪みをさえたらずものではないか、包括的な近代文学史の建設のためにはどうしても近代戯曲の正当な位置づけが必要ではないか、といった問題意識が、ぼくの近代戯曲史への関心の大きな側面を占めてきた。

「包括的な近代文学史の建設」という研究目標がなくても、この「問題意識」は理解できるし、またそこに至る論理も肯定できる。そして論証ぬきにごくあらっぱい言い方をして恐縮ではあるが、こうした状況判断やその意味づけは「〔日本〕近代戯曲」を研究するものに共通するものといつてよい（だからここでは永平和雄氏という具体的な個性を問題にしているのではない。意識して「ある研究者」などと抽象化した表現を用いてきたのはそのためであり、以下もそのふくみでご理解いただきたい）。

そううけとめた上で、いま少しこの研究者の発言を追ってみる。氏は言う。

すくなくとも近代戯曲史の研究のためには、まず「戯曲」であるがために抹殺されてしまった、全体としてはおびただしい量の作品を丹念に調査し直し、その詳細な年表を作製し、その上に埋もれた作家や作品を正しく再評価してゆく作業が必要である……

「著しく遅れているようにおもわれる」「戯曲史の研究」状況に対してこの作業課題の要請は当然であろう。しかし永平氏の力点はそのあとにある。つづけてこう述べられている。

……作業が必要であるが、同時に「近代戯曲」の形成への基本的なコースがどこにあったかを、かなり巨視的に見定めてゆくこと、それを通じて在来の文学史・演劇史の上で恣意的に扱われてきた作品を、ひとまず近代文学としての戯曲への基本線に沿って位置づける試みも不可欠だともう。

評価の規準もなく、ただむやみやたらに「おびたしい量の作品を丹念に調査し直し」てもはじまらないという提言が含蓄されていて、たいへん意味のある警告であると思うが、ではそこで規準とされるものはないか。引用した部分からでもうかがわれるように、ここでは「近代戯曲」あるいは「近代文学としての戯曲」という概念が重要な意味を持たせられていることに気がつく。

それはどういう内実なのか。引用のさらに前のところで氏は書く、「明治維新以後、曲りなりにも『近代』社会が実現すれば、日本演劇の各ジャンルにわたって、社会の変化が『近代化』として現われるのは当然であった」、しかし「日本演劇の近代化と日本近代劇の成立とを同一視しえないことは言うまでもあるまい」、そして、その「『近代劇』の創造には『近代戯曲』が、近代文学としての戯曲こそが中核に据えられ……なければならぬ」と。つまり「曲りなりにも『近代』社会が実現すれば、日本演劇の各ジャンルにわたって」、それゆえ戯曲というジャンルでも「近代化」ということが「現われるのは当然」である。だが、それは、氏の表現をもじって言えば「日本戯曲の近代化」にすぎず、それと「日本近代戯曲の成立」とを、あるいは「近代化」された戯曲と「近代文学としての戯曲」をごっちゃにするな、というのである。

くだいようだが、これは必ずしも永平氏に独特の日本近代戯曲史への接近のしかたではなく、だからこそ「日本における演劇的近代」といったような問題の立て方をする文章がしばしば見うけられるのだ、とぼくは考えている。

さしあたり、その真意をどこまで理解しているかはともかく、こういう問題・問題意識があることに留意しておきたい。その上で、なおここで問題にしようとしている「近代戯曲」、つまり編集され、かつ解説しよう

している「近代戯曲」とは、ひとまず近代（社会）で——むろん日本の——生まれた戯曲だとおさえておこうというのである。そうするのは、この『近代戯曲集』の編成の方針に対して重大な疑問があり、しかしいまさらいかんともしようがないので、苦肉の策として、せつかくのああいふ提言にも目をつぶって、こうおさえておくというのではない。かりにこの巻に収める戯曲群を編成する仕事を最初から受け持たされたとしても、やはりよくはまずこのようにおさえ、そしてそのむねをことわるだろう。

どうしてかといえ、以下の「解説」が本来は実質的に答えるべきであり、またそれでよいのだと思うが、やや論点をあらかじめ整理して言え、こういうことになろうか。

と言っても、安定したみじんもゆれ動かない「近代戯曲」——永平氏の文脈に沿って使っているが——観・「近代戯曲史」観があつてもものを言うのではない。その意味では永平氏ひいてはあの通説的見解——と書いたが、すでにふれたように「戯曲史の研究はいぜんとして著しく遅れている」ような研究状況での発言であり、この「通説」は保守的・伝統的な性格を持たず、むしろ先駆者的・開拓者的な役割をになっている人たちの間の「通説」であることを改めてことわっておきたいが——を正面から批判するという自覚のもとに何ごとかを言おうというのでもない。すぐあとでふれるが、むしろよくには「通説」が含蓄する論理・志向を肯定する気持さえある。それにもかかわらず、永平氏たちのあとにさつと従えないのは、戯曲ひいては演劇の「近代化」という概念で思ひ浮かべる、そのイメージ・表象が、あのように言う永平氏の場合には多分はつきりしているに違いないのに反し、こちらはいまいだからである。

「著しく遅れているようにおもわれる」「戯曲史の研究」の現状の中で、「近代化」論がどのようにあらわれているのか、よく自身はつまびらかにはしない。しかし視野をいくらか広げて、いわゆる「近代化」論というもの

章それ自体の新たな創造という未曾有の困苦を背負ってまで新文学への道へとつき進ませた原動力は何であつたらうか。ヨーロッパ近代文学に近い作品を書くこととする「文学」意識などではなく、具体的な明治の社会における、人間としての自己矛盾の意識、端的な「人生」への問いかけではなかつたらうか。……日本近代社会が急激に露呈する矛盾を、時代の子として、近代知識人たる己の魂の分裂としてうけとめ、その克服の可能を探求すること、それが彼らにとつての創作という仕事ではなかつたか。おそらくジャンルを意識することなどきわめて微かであつたらう。二葉亭は文学そのものをすら終生信じなかつたのである(傍点祖父江)。

大まかに言つて、これは、「近代文学としての戯曲」概念のうち、あの「近代日本の現実に対決」する要素をより立ち入って説明したものとも言いえようが、すでにここには傍点をつけておいたところからうかがわれるように、微妙なかたちで、「ジャンル」の問題、つまり「戯曲という形式に形象化する」といういまひとつの要素が後景にしりぞけられていることに気がつく。こうした文脈の流れに沿って永平氏は言う。

明治三十年代からしきりに制作されるイブセン模倣の戯曲の、どの一篇をとつてみても、劇作という行為そのものが、作家の内面の「近代」との葛藤から発想されている作品はない……。……観念的に理解されたイブセン戯曲から、劇の枠組みは作者の内部のモチーフと関わりなく常に存在していた。つまりドラマトゥルギーは、すでに他人によつて作られた技法として外側から与えられ、若干の、公認された「近代的」合理主義的な解釈を加えたり、既成の「近代」を材料として枠内にあてはめれば、新しい戯曲が成立したのである。まさしくそれは新しかったが、しかしまことに手軽な「新しさ」であつた。たしかにイブセンは学ばれたけれども、それはイブセン戯曲の人物の台詞にイブセンの思想が直接吐露されて

いると信じ、自己の作品中の人物の口から同様の思想の表白を行なわせるという方法で簡単に手に入れることのできるものであった。したがってどの作者の作品にも、ただイプセン張りの台詞があるというだけで、そこには作家の独自の方法上の探求はもとより、個性の影さえしていなかったのである。その「新しさ」が近代文学の新しさでないことは言うまでもあるまい。

手取り早く言えば、先にふれた「近代化」された戯曲というのは、ここで言われている「新しい戯曲」と同じとおさえてよいだろう。その内実については、この永平氏の説明・評価を認めるとして、なお永平氏の作図した道筋にぼくがついていけないのは、おそらくここにあるのだ。つまり、あの「戯曲という形式に形象化する」という要素が、「近代文学としての戯曲」の不可欠の条件として成立するためには、こういう「新しい戯曲」が、そのすべてが、と言っては多分まちがいになり、それこそ「近代化」論に足をすくわれているという批判を甘受せねばならぬと自覚するが、にもかかわらず、やはり媒介になっているとぼくはいまのところ考えざるをえないという点に。

この点をなお少し補っておこう。いま永平氏の「現実に対決」する要素と「戯曲という形式に形象化する」要素とをそなえた「近代文学としての戯曲」という規定に見合うように、ここで、その戯曲をもふくめて近代文学は、作者の内面的・主体的真実性にどこまでも根ざしながら、フィクションを媒介として、その普遍性・社会性・客観性を獲得するのが本筋だとする文学論的常識をひとまず前提として確認しておこう。すると、よく言われるように、近代日本にあつては、そのフィクションの要素が十分には開花せず、それゆえ近代文学の支配的ジャンルである小説が「私小説」という近代日本に独自の小説形式に結実していく傾向が強く、かつそれが文学の極致